



放課後の蜜肌教室

人妻女教師と優等生

天草白

挿絵 / mama

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

プロローグ	魅惑の人妻女教師	4
第一章	放課後の補習は筆下ろし	9
第二章	夜のプールで禁断レッスン	49
第三章	屋上で淫らな昼休み	98
第四章	優等生が捧げてくれた純潔	144
第五章	人妻女教師と優等生の狭間で	185
第六章	二人がかりの性愛奉仕	242
エピローグ	魅惑の学園生活	283

登場人物

Characters

谷村真弓

(たにむらまゆみ)

県立原河高校に勤める結婚五年目の人妻女教師。ややキツめの性格ながら教育熱心で、まろやかな肉に包まれたボリュームたっぷりの肢体の持ち主。水泳部の顧問をしている。

新藤百合

(しんどうゆり)

幸太のクラスメイトの図書委員。真面目で引っ込み思案な性格ながら恋には一途。ちょっと嫉妬深い性格で、時には思い切った行動を取ることもある。

浅野幸太

(あさのこうた)

県立原河高校の新入生。学園近くのアパートで一人暮らしをしている。女性との交際経験がないが何事にも一生懸命でひたむきな少年。

真弓は、隣の教室まで聞こえそうなほど大きな声を出していた。

欲情に瞳を輝かせ、伸びやかな裸身をくねらせる。下から腕を伸ばして幸太の首筋に巻きつけた。そのまま自分に向かって引き寄せ、唇を突きだしてキスをせがんだ。

もちろん幸太は喜び勇んで誘いに応じる。ピストンの勢いはそのままに、紅色のルーージュが塗られた唇に自分の唇を重ねていった。

憧れの女性と交わすキスの感触に、何度味わってもけっして飽きない陶酔と愉悦がこみあげる。今度は自分から相手の唇を割り、舌をこじ入れた。

「んっ……はむっ」

いきなりの攻勢に驚いたのか、真弓の切れ長の瞳がわずかに揺れる。

口内に舌を到達させると、すぐさま女教師の舌が出迎えてくれた。稚拙な技巧ながらも懸命に舌を絡めていく。互いの唾液をすすりあうような濃厚な口づけ。

ディープキスを続けながら、幸太はなおもスラストを繰り返す。両脚を踏ん張り、腰全体をぶつけていく。

「ああっ、な、長い！ 長くて、固いわ……！ すごく、いいっ……！！」

真弓はキスを解き、唇を丸く開けて喘いだ。艶めいた嘆声をもらす。

「あの人とは全然違う……はああっ」

あの人、とはきつと真弓の夫のことだろう。彼女の正当なパートナーのことを思い、軽いめまいにも似た嫉妬を覚えた。真弓はもう結婚しているのだ、という当たり前の事実にはショックを受けてしまう。

それでも今は自分の身体の下で喘ぐ美しい女教師を少しでも悦ばせようと、意識を切り替えて腰を振りたくった。懸命にピストンを続け、ぬらりと粘つく肉孔をえぐっていく。

「うう、すごい締まるっ！」

真弓の膈壁はヒダのひとつひとつが独立して動いているかのように、さまざまな角度でうごめき、肉茎の表面をこすりあげる。

性器そのものを搾り取られるような悦楽に酔いながら、幸太は身体を前傾させた。仰向けの姿勢になっているため、女教師の豊乳が扁平に形を変え、たぶん、たぶんと揺れていた。

むちむちと肉の詰まった双丘に顔を寄せる。舌先を尖らせ、揺れる乳首に這わせる。と、真弓の背中が弓なりにのけぞった。

「はうん、そ、そこはっ！」

「ま、真弓先生、おっぱいの先っぽが感じるんですよねっ」

先ほど胸を責めたときの記憶を引つ張りだし、幸太が喜びの叫びを上げた。性技が未熟なのは仕方がないにしても、少しでも真弓に気持ちよくなってもらいたかった。女教師から与えてもらった数々の快感に、少しでも報いたかった。一方的に気持ちよくしてもらえばかりでは悔しい、という少年らしい負けん気もあった。

(僕だって、真弓先生を感じさせたい！)

強い意志を心に刻み、舌を、唇を這わせていく。舌先で突くだけでなく、乳首を上から押しつぶすように舌の腹で押さえつける。

真弓の身体が小刻みに揺れていた。首筋から鎖骨にかけて肌が蔷薇色に染まっていた。三十二歳の女体が悦びを覚えていることを悟り、幸太はがむしやらにスラストを浴びせかけた。子宮にまで届けとばかりに思いつき突き上げる。膣奥まで深々と貫き、亀頭で前へ前へと押しだしていく。

「ひああっ、ああんっ！ す、すごいっ」

真弓の反応があきらかに変わりはじめた。細い眉を中央に寄せ、くつきりとした皺を形成する。軽やかな喘ぎ声はもはや抑えても抑えきれないのだろう。雄大な裸身を揺らし、みずからも腰を突きだして幸太のピストンを迎え撃つ。

真弓が感じている快楽に連動してか、膣の内部がウネウネとぜん動をはじめた。柔



らかな粘膜がところどころでギュッと締まり、肉根に不意打ちのような刺激と愉悅を加えてくる。

「う、ううっ」

いくらがんばったところでしょせんは童貞を失ったばかりの高校生には限界だった。グイグイとペニスを締めあげられ、あっという間に肉交のペースを相手に奪い返されてしまう。

「はあ、はあ……あうんっ……イキそうなら……あはあっ……イ、イッてもいいのよ」
下腹部を小刻みに震わせながら真弓が誘いかけた。妖艶な笑みが深まり、膣孔の締めつけは耐えがたいほどの射精感をもたらした。

「ああ……もう、駄目ですっ」

幸太は顔をしかめると、最後に一突き思いっきりペニスを打ちこんだ。激しく沸きおこる射精感に任せ、欲望の引き金を引き絞った。

熱い衝動が輸精管から尿道口までを駆け抜ける。どくっ、どくっ、と音がしそうなほどの勢いで真弓の膣孔にスペルマを放った。

おびただしい量の精液がほとばしり、豊潤な膣内いっぱいに広がっていく。最初に放った精液と合わせ、二度にわたる放精。女教師の膣を自分の子種で占拠したような

征服感に幸太は小さく雄たけびを上げた。

永遠とも思えるほどの時間、射精を続け、最後の一滴までドクドクと注ぎこむとやがてゆっくり肉茎を引き抜いた。

「ふうっ……」

三度に及ぶ射精でさすがに若いペニスもぐったりと萎えている。心地よい虚脱感に酔い、幸太は床の上に腰を落とした。

一方の真弓は、教卓に身体を乗せたまま微動だにしない。瑞々しいスペルマを胎内で受け止めた余韻に浸っているのだろうか。わずかに開いた唇からは気持ちよさそうな吐息が断続的にこぼれている。

ふん、と精液の匂いが漂ってきて、あらためて視線を落とした。女教師のむき出しの女陰は白濁したスペルマにまみれている。二枚の花弁は真っ白に染まり、秘孔の奥からは今も逆流した精液が垂れ落ちていた。太ももまで引き下ろされたショーツとストッキングはすっかりザーメンまみれだ。

淫猥な眺めに息を呑みながら、幸太は自分がかしたことの重大さに気づいた。

「す、すみません。僕、夢中で……先生の中に、出しちゃって……」

憧れの真弓との初体験に舞い上がり、避妊のことなど頭から吹き飛んでいた。そも

そも童貞の高校生にとって、そこまで思考を巡らせる心の余裕がまったくなかった。結果として、幸太は若く濃厚な精液を女教師の奥深くに注ぎこんでしまった。それも二度も。

もし妊娠したらどうしよう——そんな不安と焦燥が幸太の胸を突き刺した。

「今日は大丈夫な日よ。心配しないで」

真弓が軽く首を振って微笑む。幸太と違い、ちゃんと生理周期のことも頭に入れてセックスをしていたのだろう。大人の余裕だった。

「初めてなんだから中に出してもらいたかったの。だからあたしもあえて拒まなかったわ」

幸太の初体験を最高の思い出にしよう、と真弓は気を遣ってくれたのだ。普段は勝負な女教師の優しい一面に、幸太はあらためて尊敬とそして感謝の念を抱く。

「どう、気持ちよかったですか？」

「は、はい、すごく……」

至福の表情で幸太は頬を緩める。自然と笑みが浮かんだ。

真弓もまた満ち足りたような笑顔になり、艶然と告げた。

「これで童貞は卒業ね、浅野くん。特別授業は合格よ」

言葉通り不安なのか、真弓はわずかに顔をこわばらせながらも悪戯っぽく微笑んでみせた。

「じゃあ最初はしっかりとほぐしてくれる？ 初めてだと痛いかもしれないから」

「……はい」

幸太は緊張気味に放射状の皺を指の腹でさすりだした。

「こ、こんな感じですか」

おっかなびっくり、円を描くような動きでマッサージしていく。指全体に唾液をまぶし、繊細なアナルにすりこんでいく。本来触れてはいけない場所に触れているのだと思うと、それだけで肉根に血流が集まり雄々しくそそり立っていく。

(指、入るかな……)

高ぶる興奮に唾を何度も飲みこんだ。少しずつ力を強めて圧迫するとあめ色のアヌス全体が窪んでいった。そのままの勢いで人差し指の先を差し入れる。火傷しそうなほど熱い肛門粘膜の感触があった。

「きゃあっ……あん」

眼下で左右の尻肉が敏感に揺れた。

「だ、大丈夫ですかっ？」

幸太は驚いて指を引っこ抜きそうになってしまふ。しかしよく見れば真弓はむしろ背中のあたりを紅潮させ、妖しく息を荒げている。痛がっているようなそぶりはなく、むしろ真弓の態度は――

（先生も感じてくれてる……?）

幸太はそう確信し、指を左右にひねりながらゆっくりと菊穴内部に沈めた。異物をはじめださうとする括約筋の弾力は思った以上に強い。指全体を直腸粘膜が締めつけてくる。

「うわ、きつい。本当に痛くないですか、先生」

「だ、大丈夫よ。ちょっとだけ、きついけど」

真弓が息を軽くはずませた。

「じゃあ、私も……私がお手伝いすれば」

横合いから身体を乗り出したのは百合だった。真弓の気を逸らして肛門への負担を少しでも減らそうというのか、こわごわとした手つきながら真弓の豊満な乳房へと指先を這わせていく。

「あ、やああつ」

さすがに同性だけあって性感帯をよく知っているのだろう。百合の指使いに真弓が

あでやかな嬌声を上げる。同時に肛門の締めつけがほんの少し緩んだ気がした。

幸太はこの機を逃さず、第一関節から第二関節、そして指の付け根までを押し沈めていった。指の腹で腸壁を撫でるとわずかにぬめった感触がした。力を入れずにくすぐるような感じで腸壁をさすっていく。

「あ……いい感じよ、はぁっ！」

思ったより痛みがないのか、真弓は陶然とした表情だ。もう一方の手で尻たぶを揉みしだきながら幸太は指にひねりを加えた。ドリルのように回転させて未通の尻穴をえぐっていく。

少しずつ勢いを強めてデリケートな直腸をほぐし、ころあいを見て指を引き抜いた。眼下ではわずかに汗ばんだ尻が揺れている。幸太は身体を前傾させるとおもむろに顔を寄せた。ひく、ひく、とうごめく肛門に軽くキスを浴びせる。

「きゃあっ、あ、浅野くん、口を使っちゃだめっ。汚いわ！」

「平気だよ。先生の身体に汚い場所なんて、ないよ」

ちゅっ、ちゅっ、と音をたて、恋する女性の排泄器官に何度となく口づけした。

「だめ……だめ、なの……口は、だめえ」

真弓を相手にして嫌悪感などあるはずがなかった。むしろ触れてはいけな場所に

触れ、キスまでしているのだという背德的な気持ちに胸が早鐘を打つ。

先ほどの指戯である程度ほぐれている菊肛にびったりと唇をつけた。舌をくねらせて内部へと差し入れると、舌尖に熱い直腸粘膜の感触がした。

「はあああつ、あああつ、あんっ」

腸壁を舐め、舌でなぞるたびに、人妻女教師は断続的な悲鳴を上げる。

唾液が十分に染み渡ったためか、アナルがずいぶん柔らかくなっていった。これならペニスを挿入しても大丈夫かもしれない。

「真弓先生……」

百合も二人のサポートをするように胸の双丘や首筋を指で撫で、あるいは唇を這わせていた。普段の百合らしからぬ大胆な行為は、彼女も先ほどのオルガスムスや3Pという特殊な状況下によって興奮を高ぶらせているからかもしれない。

幸太は女教師の尻の谷間から顔を上げた。いよいよ挿入だ。その気配を感じ取ったのか、真弓の顔におびえた表情が浮かんだ。

「初めてだから……優しくしてね」

艶っぽく濡れた声でささやく。これほど可憐な女教師を見るのは初めてだった。勝気で凛々しい姿ならいつも目にしてきたが、今の真弓はまるで初体験を迎える乙女の

ようだった。

いや実際にアナルセックスは初体験なのだから当然なのかもしれない。あらためて女教師への愛おしさがこみあげ、幸太は力強くうなずくと肉の切っ先を放射状のすばまりにあてがった。中心部を見定め、慎重に腰を押しだした。

「う、くっ」

幸太は思わず気張ってしまう。柔らかなアナル周辺がわずかに窪むがそれだけだ。肛門の抵抗感は膣とは比べ物にならない。頑強なゴムの壁を前にしているかのよう。うにいくら押ししてもビクともしない。

「せ、先生、もっと力を抜いて」

幸太は真弓のなだらかな背中の中のラインを手のひらで優しく撫でた。力任せに押すだけでは入りそうになかった。結合を果たすためには女教師の協力が必要だ。

幸太が綺麗な背骨に沿って指先を這わせる。

「んっ……」

気持ちよさそうに喘ぐとその反動で真弓の尻がキュッと持ち上がった。幸太はさらに腰全体を押しこんだ。唾液によって柔らかくほぐれた菊肛はさらなる圧迫を受けて窪んでいく。

「もう少しで……」

手ごたえを感じて一気に全体重を浴びせかけた。ガーターストッキングに包まれた太ももが小刻みに震えている。幸太はペニスをねじ込むような感覚で下腹を前へ突きだした。

「はっ、ああああっ！」

真弓が、百合が処女を失ったときに上げた声とよく似た悲鳴を上げた。

自分が女教師の『初めて』を奪おうとしているのだと意気こみ、幸太は肉棒を突き入れた。太い先端部が肛穴を丸く開き、ずぶずぶと潜っていくと、固い輪っかを通り抜けるような感触がした。あめ色のすぼまりを押し広げて亀頭部が完全に埋まっていた。

一番太い部分が通り抜けると後はまっすぐ押しこむだけだ。左右にひねりを加えながら茎脰を差し入れていく。腸内粘膜を内部に巻きこむようにしてインサートする。

「くうっ、きついっ……！」

括約筋の弾性に苦戦しながらも、幸太はなんとか付け根まで後孔へ挿入した。

「は、入ったよ、先生……」

肛門の中に少年のペニスが埋没しているのを感じ取ったのか、真弓は深々と吐息をもらした。普段では考えられないほどか細いため息は、バージンを失った感慨に浸っ

ているためかもしれない。

「嬉しい……君に処女を捧げることができて」

首を曲げてゆつくりと振り返った真弓の目尻には薄く涙がにじんでいる。歓喜と感動の思いをたたえた涙。

「僕も嬉しいです。やっと真弓先生の初めての男になれた」

至福に打ち震えながら幸太は抽送を開始した。前の穴と違い、こちらは未通だった場所だ。腸内粘膜を傷つけないよう慎重に動いていく。

「痛くないですか、先生？」

「んっ……す、少しずつ速くしてくれれば、大丈夫よ……ああっ」

真弓は深々とため息をつきながら告げる。首筋に汗の珠が浮いていた。やはり初めての肛交は相当の圧迫感があるのだろう。

憧れの女教師になるべく負担がかからないよう、幸太はゆったりとしたリズムで肉柱を練りこんでいく。腸孔への出し入れを繰り返しているうちだんだんと内部が柔らかくほぐれてきた。ぬるり、と蕩ける感触は腸液が染み出ているせいだろう。

「わ、私も……幸太くん」

呆然とした顔でアナルセックスを見つめたまま、一人だけ取り残された格好の百合

が二人の交わりに加わってきた。横から幸太に抱きつき、顔を寄せてくる。

幸太は右手で彼女の肩に手を回して横抱きにした。綺麗なバージンピンクに輝く唇を力強く奪う。

百合とキスを交わしながら幸太は真弓へのピストンも継続していた。あれほど困難だった抽送が今やスムーズに運ぶ。膣内とは違う直腸のツルツルとした感触を味わいながら、幸太は少しずつスピードを上げていった。

「ど、どう、真弓先生？」

「ああ……お尻の中が、熱いわ……こんなの、初めてえ」

うわごとのような口調で真弓がうめく。初めて味わうアナルセックスに、幸太の抽送に、さしもの経験豊かな女教師も翻弄されているような声音だった。

自分が主導権を握っていることを確信すると幸太は俄然勢いに乗った。下腹の動きを加速する。直線的にえぐるだけでなく腰を回しこんで腸内を押し広げていく。深々と打ちこんだ後は浅いスラストを繰り返し、肛門周辺を集中的にこすりあげる。

緩急をおりませた責めに真弓の全身が薔薇色に染まりだした。豊満な肢体に滝のような汗が流れ、妖しい湯気がたちのぼった。

「や、やだ、これ……なに、きちゃう……!?!」

真弓の態度にいつもの余裕が感じられない。普段のセックスではほとんど幸太が導いてもらう立場だったが今は違う。アナルセックスに関しては真弓も初めてだ。立場は五分だった。

（だったら僕が真弓先生をリードしたい。もつと、もつと！）

幸太は表情を凜と引き締め、抽送をさらに強める。その合間には百合をあらためて抱き寄せ、ふたたび唇を重ねていく。

「ん……ふっ」

鼻にかかった甘い吐息をこぼし、百合はうっとりとした顔で幸太のキスを受け入れていた。互いの唇を強く重ね、ごく自然に舌を絡めあう。もはや唇を軽く触れあわせただけで震えていたあのころの百合とは違っていた。

より深く、より濃厚に結びつこうと積極的に迫ってくる。もちろんおとなしく控えめな彼女の本質は変わらないが、それでも恋する男の子のために一生懸命がんばろうとする意識は十分つたわってきた。

そんな百合が愛おしくてたまらない。腸孔へ肉茎を繰り返しながら右手を百合の股間に這わせると、二度の射精を受けて濡れそぼった穴へ二本の指を差し入れた。ずぶりと根元まで一気に押し入る。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 11月発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!